

種の個体説を哲学的に再構築する：
トマス・アクィナスとマイケル・ギセリン

石田 隆太

1 はじめに

本稿の目的は、西洋中世のスコラ哲学者トマス・アクィナス（c. 1225–74）が天使に関して主張した種の個体説を哲学的に理解する何らかの可能性を探ることである。そのために本稿では、生物学哲学者マイケル・ギセリン（1939–）が生物種に関して主張した種の個体説を参照することでこの目的に迫ることを考えている。

天使に関する種の個体説によれば¹、人間のように通常は複数の個体に種が一つあるのとは異なり、天使という特殊な存在者においては一つの個体ごとに種が一つある。すなわち、天使 A と天使 B は種として異なる。さらに、天使の場合には一つの種に一つの個体しか属さないということもこの学説では主張される。このようにしてアクィナスは、複数の個体が一つの種に属するというのと一つの個体しか属さない種が複数あるということを含む種の理論を有している。こうした理論の一部である種の個体説に対して、天使論という枠に限定しない仕方で哲学（史）の主題にすることができないだろうか。そこで、全く異なる文脈で主張された説ではあるものの、特に生物学哲学の世界で賛否両論を含めて様々な議論を引き起こしたギセリンによる種の個体説を参照する。なぜなら、種タクソンが個体であると主張している点でアクィナスとギセリンの間に形式的には共通点を見出すことができるからである。その場合に特に注目したいのは、両者における個体概念の規定である。種とは何かという根本的な問いを含む種問題に正面から取り組む場合、天使と生物という対象の根本的な違いに突き当たってしまう。そうではなくて、議論の出発点とされることの多い個体概念について検討するというアプローチならば、両者の議論を対照させ

¹ アクィナスが天使における種の個体説を主張している主要な箇所は次の通りである：『「命題集」註解』第2巻第3区分第1問題第4項；『対異教徒大全』第2巻第93章；『定期討論集 霊的被造物について』第8項；『神学大全』第1部第50問題第4項。

ることに意味を見出すことができるだろう。本稿が哲学史の再構築という言葉によって意味するのは、アキナスの天使論における一つの論点にすぎなかったものをこのようにして外部の議論に接続しようとすることである。そのようなことを期待しながら早速議論を始めることにしたい。

2 ギセリンが提示する個体の六つの基準

まずはギセリンによる種の個体説について述べることから始めよう。1974年の有名な論文「種問題への根本的な解決策」(“A Radical Solution to the Species Problem”)に代表されるように、ギセリンは生物種を従来のようにクラス(すなわち普遍)と見なすのではなくて個体と見なすことで、種に対する一つの独自の考えを保持している。この考えは、彼の立場を最も体系的な仕方で提示することが試みられた1997年の単著『形而上学と種の起源』(*Metaphysics and the Origin of Species*)でも保持されている。この本のタイトルは言うまでもなく、チャールズ・ダーウィン(1809–82)の『種の起源』(*The Origin of Species*)と、生物種を相互交配集団と見なす生物学的種概念の提唱者として有名なエルンスト・マイヤー(1904–2005)の『体系学と種の起源』(*Systematics and the Origin of Species*)に由来している。ただしギセリンは、従来の実体と性質を基盤とする西洋の伝統的な形而上学とは別に、進化という動的な変化そのものを根本的な実在と捉える「プロセス形而上学」(process metaphysics)を構想している点で²、ダーウィンやマイヤーの考えを形而上学的に表現しようとしている。

さて本節では、ギセリンによる種の個体説において前提とされている個体概念を理解することにしよう。『形而上学と種の起源』(以下MOSと略記)では次の六つが個体であることの基準として挙げられている³。すなわち、①「例化不可能性」(non-instantiability)、②「時空上の制約」(spatio-temporal restriction)、③「具体性」(concreteness)、④「法則における無機能」(not functioning in laws)、⑤「定義する性質の欠如」(lack of defining properties)、⑥「存在論的な自立性」(ontological autonomy)のことである。以下ではMOSでの記述に沿ってこの六

² Michael T. Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, Albany: State University of New York Press, 1997, 30, 132–33, 303.

³ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 49.

つの基準を見ていくことにしよう。

まず①例化不可能性については⁴、それが、例化が可能であるクラスとそうでない個体を分ける最も重要な基準であるとギセリンは考えている。ギセリンも参照しているように、スコラ哲学の研究者でもあるホルヘ・グラシア(1942–2021)にいたっては、個性性という概念に関する自身の哲学的な著作で例化不可能性のみを個性性の唯一の基準としているほどである⁵。こうした例化不可能性を軸にして区別されるのは、部分—全体の関係にあるものと「クラス包含」(class inclusion)の関係にあるものである。このことを説明するためにギセリンは、ジョン・スチュアート・ミル(1806–73)が『論理学体系』(*A System of Logic*)において「一般名」(general name)と「集合名」(collective name)の区別を説明するために用いた例を参考にしている。ジョーンズが兵士であると言われる場合、ジョーンズは兵士というクラスの(論理的な意味での)成員であるということが言われている。第76連隊が連隊であると言われる場合、第76連隊は連隊というクラスの成員であるということが言われている。ジョーンズはまた軍人というクラスのメンバーでもあり、有機体というクラスのメンバーでもある。この有機体、軍人、兵士というクラスの間にはクラス包含の関係が見られる。有機体というクラスが軍人というクラスを包含しており、また軍人というクラスが兵士というクラスを包含しているということは、有機体というクラスが兵士というクラスを包含していることを含意する。それに対して、兵士というクラスと連隊というクラスの間には包含関係が全くない。すなわち、第76連隊が連隊であり、ジョーンズという兵士が第76連隊の一員であることは、ジョーンズという兵士が連隊であることを含意しない。しかしながら、ジョーンズは第76連隊の一部であり、第76連隊は英国陸軍の一部である。その場合、ジョーンズは英国陸軍の一部である。第76連隊や英国陸軍は集合名でもあるが、この名によって表示される集団は例化可能なクラスではない別の集まりである。こうした部分—全体の関係をギセリンは「組み込み」(incorporation)と呼ぶ。たとえば、私の身体は私の肝臓を組み込んでいるし、私の肝臓は私の身体に組み込まれて

⁴ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 38–41.

⁵ Jorge J. E. Gracia, *Individuality: An Essay on the Foundations of Metaphysics*, Albany: State University of New York Press, 1988.

いる。このようにしてギセリンは、クラス包含と組み込みを区別することで、自らによる種の個体説においては種タクソンと個々の有機体の関係がクラス包含ではなくて組み込みの関係にあることを示していく。

次に②時空上の制約についても⁶、クラスには時空上の制約がないのに対して、個体には時空上の制約があるとギセリンは考えている。すなわち、個体は時空上の決められた位置を占めていて、始まりと終わりをもつ。個体は、一度でも存在することをやめてしまうと永遠に消滅したままである。生物学的な文脈で言えば、ある有機体は一度でも死んでしまうと再び存在することはないし、また或る種は一度でも絶滅してしまうと再び存在することはない。別の例を取りあげると、ある椅子という個体は特定の時間に特定の場所において存在するが、椅子のクラスはそのクラスの成員が持つ位置づけとは別には何らの位置づけももたない。仮にこの世界に存在するすべての椅子を破壊した後新しい椅子を作ったとしても、椅子というクラスは存在しなくなって代わりに別の何かに置き換えられたとは言わないだろう。クラスは常に成員を確保している必要はない。このようにしてギセリンは、時空上の制約が少なくとも個体であることの必要条件であると述べている。

③具体性については⁷、例外なくすべての個体は抽象的ではなくて具体的であり、こうした具体性は、クラスがもつ抽象性とは違って程度の違いを許容しないとギセリンは考えている。具体性と対置される抽象性に関してギセリンは、たとえばある猫という具体的な対象から抽象されるような猫の「気持ち」(affectionateness)という属性を抽象的なものと想定するミルよりも、抽象性を「一般性」(generality)と関連づけるジョン・ロック(1632–1704)の考えを主として念頭に置いている。たとえば、家畜化された有機体というクラスを置いて、それにはペット、イエネコという包含関係にあるクラスが下位に従属しているとすると、パフのような一匹の子猫に至るまで、より一般的なものからより個別的なものにまで進むことができる。より包含的なクラスはより多くの成員をもつが、それだけそのクラスに属する個々の成員は共通な形質をもつことがなくなる。他方で、諸々の全体と部分からなるあるヒエラルキーがあつて、

⁶ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 41–42.

⁷ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 42–44.

そこではより高位のものの方がより低位のものよりも多くのものを組み込んでいるとするなら、ある意味では、より高位にある事物の方がより一般的であり、より低位にある事物の方がより個別的である。たとえば、パフは自分の爪よりも一般的である。そしてパフのようなある個的な猫を飼うことはできるが、「ペット一般」(pet in general)を飼うことはできない。ましてなおさら、家畜化された有機体そのものを飼うこともできない。私が引っ掻かれるとするなら、それは、パフのようなある個的な子猫によって、かつそれがもつ個的な爪をもってしてということになる。さらにギセリンは、ある個別的な引っ掻きやある個別的なものどのごろごろ鳴らしを個体として一度でも認めるなら、こうした個別的なものすべてに具体性という概念を適用することが必然的であると言う。具体性を必ずしもパフのような個別的な実体にのみ適用しないということが種の個体説にとっても重要になってくる。

④法則における無機能については⁸、個体である限りでの個体には何らの自然法則もなく、ただ個体が属するクラスに対してのみ自然法則があるとギセリンは考えている。自然法則は時空上の制約を受けないともギセリンは言う。それゆえ、天体一般に関しては自然法則があるものの、火星や天の川銀河それぞれに関する固有の自然法則があるわけではない。このような考え方自体は、個体に関する学知は成り立たないと考える西洋のある伝統的な考え方に通じるものとも言える⁹。

クラスに対する法則の適用に関する考察から、⑤定義する性質の欠如が導かれる¹⁰。ギセリンによれば、水のような「自然種」(natural kind)について必然的に真であるものは物理的な必然性について真であるのに対して、「人工種」(artificial kind)について必然的に真であるものは論理的な必然性について真である。人工種の例としてギセリンが挙げているのは、「ゴミ」(garbage)、「ギセリン」(Ghiselin)、「幾何学」(geometry)のように英語では《g》という文字から始まる名前をもつものすべてという人工種である。そして、個体について真であるものは偶然的な事実という観点によってのみ真であるので、それは全く

⁸ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 44–45.

⁹ たとえばアリストテレスは『魂について』第2巻第5章(417b22–23)で、「感覚」(αἴσθησις)は個別的なものに関わるが、「学知」(ἐπιστήμη)は普遍的なものに関わると言う。

¹⁰ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 45–46.

必然的ではないとギセリンは言う。たとえば、パーティーで知らない人 A の名前が言及されたとしよう。A とは誰なのかを尋ねた際に、パーティーの主催者と話しているひげ面の男が A だと言われた。しかし、ひげ面であるという性質が A を定義しているのではない。なぜなら、たとえ A がひげを剃っても A は A のままだろうからである。また、たとえ A が今はひげを生やしているとしても、それは偶然的な事実にすぎない。なぜなら、A はその日に事前にひげを剃っていることもできたからである。パーティーの主催者と話しているという性質についても同様のことが言える。このようにして、個体がもつ性質がすべて偶然的なものであることが強調されている。

⑥存在論的な自立性については¹¹、個体であることは任意のクラスの成員であることに対して存在論的に先行しているとギセリンは考えている。逆に言えば、個体がいくらかでもクラスに対して存在論的に依存しているという観念は「本質」(essence) という観念と関係している。もし個体の本質をもち、個体がまさにしかじかのものであるようにしているのが本質であるとするなら、本質的な性質を少しでも失うことは個体が存続することの危機を含意していることになる。このような本質主義を採用しない仕方でギセリンは、個体だけが存在することを始めたりやめたりすることができ、変化と普通は呼ばれるものをこうむることができるという。このような立場を採用する際にギセリンは、自らに近い立場の哲学者としてイマヌエル・カント (1724–1804) とバートランド・ラッセル (1872–1970) の名前を挙げているのに対して、本質主義的な立場の代表格としてアリストテレスの名前を挙げている。ここからも、ギセリンによる種の個体説が持つ唯名論的な性格を窺うことができる¹²。

3 アクィナスによる天使に関する種の個体説

次に、アクィナスによる種の個体説について述べることにしよう。ただし本題に入る前に、天使に関するアクィナスの学説を哲学的な考察の対象にするこ

¹¹ Ghiselin, *Metaphysics and the Origin of Species*, 46–49.

¹² 本節全体にわたって次の記述を参考に行っている：佐古仁志、「ギセリンの種の個物説とリードの生態学的アプローチ」、『年報人間科学』31 (2010): 16–19。またギセリンによる種の個体説を主題的に扱った日本語論文としては次のものを挙げるができる：生野剛志、「種の個体説について：Michael T. Ghiselin. “Species Concepts, Individuality, and Objectivity” を中心として」、『哲学研究論集』6 (2010): 116–24。

とに関して簡単に弁解しておくことにしたい。アキナスにおいて天使は、神のように最も卓越した存在者ではないが、人間よりも上位にある存在者として位置づけられており、基本的には「知性体」(*intelligentia*)として扱われている。12世紀のスコラ学者ペトルス・ロンバルドゥス(c.1100–1160)による教科書『命題集』(*Sententiae*)に連なる伝統の中で¹³、アキナスは天使に関して次のような諸問題を議論している。A. 物体性(あるいは質料性)とどのように関わっているのか(あるいは関わっていないのか)。B. どれほどの知性的な能力をもつのか。C. 自由意志はどのように機能するのか。D. (人間であれば人格を意味する)ペルソナをどのように所有しているのか¹⁴。このA~Dはいずれも、対象を人間に限定すれば現代哲学においても問うことのできる問題であり続けている。図式的に言えば、物体性および質料性に関するAは哲学の中でも存在論の問題であり、知的な認識能力に関するBは認識論の問題である。さらに、自由に関するCや、倫理的な主体であることに関するDは倫理学の主要な問題でもある。したがって、A~Dの諸問題を共有するという点を軸にすれば、スコラ的な天使論を哲学的な議論に持ち込むことは許されるだろう。

それでは本題に戻ることにしよう。以下では、天使の種に関する個体説について最も体系的な叙述が展開されている『定期討論集 霊的被造物について』第8項主文を主として参照する¹⁵。そこでアキナスは、天使相互の異なりが種的なものであるのか否かを三つの論拠に基づいて論証する。第一の論証は「天使の実体の条件」(*condicio substantiae angelicae*)に基づいており、具体的には天使の非物体性と非質料性を根拠に据える議論である。次に、第二の論証は「宇宙の秩序」(*ordo universi*)を、第三の論証は「天使の本性の完全性」(*perfectio naturae angelicae*)を根拠に据えており、共に秩序や完全性という特殊な概念を軸にして

¹³ Petrus Lombardus, *Sententiae in IV libris distinctae*, 3 ed., Tom. 1, Pars 2, Roma: Editiones Collegii S. Bonaventurae, 1971, 341–42, n. 2.

¹⁴ たとえば、Aについては『神学大全』第1部第50–53問題を、Bについては同第1部第54–58問題を、Cについては同第1部第59問題を、Dについては『命題集注解』第2巻第3区分第1問題第2項を見よ。

¹⁵ 『霊的被造物について』の記述が体系的であることについては次を見よ：Tiziana Suarez-Nani, *Les anges et la philosophie: Subjectivité et fonction cosmologique des substances séparées à la fin du XIII^e siècle*, Paris: Librairie philosophique J. Vrin, 2002, 39. またこの箇所を含む『霊的被造物について』第8項全体の日本語訳としては次のものがある：石田隆太, 「トマス・アキナス『定期討論集 霊的被造物について』第八項 試訳」, 『宗教学・比較思想学論集』18 (2017): 77–111. ただし本稿で原文を引用する際には訳語を改めたところがある。

論証を進めている。

第一の論証については、まず天使が非質料的で単純なものであるか、それとも質料と形相から複合されたものであるかの二つが分岐として示される。前者の場合、質料から抽象されたすべてのものを形相として捉える限り、それは種という観点では一つのものでしかないということが論拠となって、複数の天使が一つの種に属することが否定される。たとえば、白さという附帯形相や人間性という実体形相がもし何らのものによっても受容されずに抽象されたものとして（プラトンの言うアイデアのように）そのまま存在するとしたら、そうした抽象物はそれぞれただ一つのものでしかない。それに対して、天使が質料と形相から複合されたものである場合、複数の天使には質料における違いが認められることになる。この場合には、質料形相論の基本的な枠組みとして、形相は質料によって受容されなければ区別されるものにはならないことが前提されている。ところで、アキナスによれば、質料が区別される仕方は二通りしかない。一つは、質料が持つ固有な本質的規定である「可能態」(potentia) に即して質料を区別することである。たとえば、場所に対する可能態だけをもつそれ自体は不可滅的な天体の質料と、存在に対する可能態をもつそれより下位の可滅的な諸物体の質料が区別される。もう一つは、量の分割に即して質料を区別することである。すなわち、特定の諸次元（縦、横、高さという三つの次元のこと）の下にある質料がそれとは別の諸次元の下にある質料から区別される。たとえば、ある机の上に置いてある二つの異なる箱を思い浮かべればよいだろう。以上を踏まえてアキナスは、可能態に即した区別は類的な相異をもたらすのに対して、量の分割に即した区別は同じ種における数的な相異をもたらすと言う。量の分割に即した区別が天使においてなされる可能性は、靈的な存在者である天使の非物体性に基づいてすぐさま否定される。それゆえ、類的な相異性が天使にもたらされる可能性が残ることになるが、これはもはや天使というまとまりすらないことと等しいことになってしまうであろう。このような推論に基づいてか、天使が質料と形相から複合されたものであるという可能性すべてが排除される。ここにいたって、『靈的被造物について』第1項で既に論証された天使の非質料

性が改めて認められている¹⁶。したがって、最初に分岐で示されたように天使は非質料的で単純なものであるという可能性のみが残り、天使同士が種的な仕方でのみ異なるものであることが確保される。

第二の論証については、まず宇宙の善には二通りあることが示される。すなわち、厳密に言えばこの世界の外に分離された形で存在する善である神と、神以外の諸事物そのもの内にある善の二つである。後者の善が、宇宙の諸部分の秩序であると言い換えられている。さて、アキナスによれば、宇宙のより上位の部分はそれだけ宇宙の善をより多く分有していなければならない。これは宇宙ないし世界の完全性として語られることの重要な前提である¹⁷。ところで、宇宙の諸部分の秩序である諸事物の善がより完全に分有されるのは、その秩序がそれ自体で自立している場合のことである。まず普通の生物のように生成消滅するものを例にした場合、一つの種に属する各々の個体そのものは、一つの種的本性を分有するだけであるので、秩序を附帯的にしか分有していない。それに対して、一つの種に一つの個体しか属しないとされる太陽や月などの天体においては、各々の個体はそれぞれがもつ種的本性に即して自立している。したがって、天体よりも上位にある天使は、宇宙の最上位の部分に存在するがゆえに、宇宙の中にあるものの中では最も自立していることが要請される。それゆえ、諸天体ですら種的にのみ異なるような仕方宇宙における秩序をもっているのだから、神に最も近い存在者である天使もやはり種という点で相互に異なるものであるという可能性が最後に残される。

第三の論証については、まず完全性の諸段階が、完全性の最上位にある神と最下位にある生成消滅するものという両極端から考察されていく。神には「全存在」(totum esse) にわたって欠けているところが何もない。それに対して、生成消滅するもののある個体には、自分が個体であることに関わることについて不足はないが、自分が属している種の本性に関わることについては不足がある。その理由としてアキナスが想定しているのは、種の本性は生成消滅するもの

¹⁶ 天使の非質料性については次も見よ：石田隆太、「質料概念と天使の非質料性——トマス・アキナスによる天使論の一側面」、『中世哲学研究』35 (2016): 22–40.

¹⁷ アキナスにおける世界の完全性については次を見よ：Oliva Blanchette, *The Perfection of the Universe according to Aquinas: A Teleological Cosmology*, University Park: The Pennsylvania State University Press, 1992.

の一個体において永続できないので、種の本性そのものはその種に属するすべての個体によって世代ごとに担われていくなどして存続していく必要があるということであろう。この両極端から出発すると、アキナスによれば、一つの種に一つの個体しかない太陽などの不可滅的な天体には、自分の種的本性に関わることが何も欠けていない。そのような天体は物体である限りで質料をもっているが、天体よりも上位にある天使においては、質料が含まれることなしに種的本性に関わることが何も欠けていない。したがって、天使においては一つの種に複数の個体が属するという構成が認められるべきではないとされる¹⁸。

4 アキナスが想定する個体としての天使

前節では、天使に関する種の個体説を主張するアキナスの主要な論証を提示した。ここでは節を改めて、その論証においてアキナスが天使に関してどのような個体概念を想定しているのかを検証することにしたい。そこで、第2節で提示したギセリンによる個体であることの六つの基準を用いることにしよう。

まず簡潔に説明できるものから順に列挙するなら、③具体性については、個々の天使は子猫のパフのように個別的な実体として想定されているので、アキナスはそれを認めていると言える。次に②時空上の制約については、天使が有する非物体性や不可滅性といった性質を考慮する限り、アキナスはほとんど考慮していない（ただし、アキナスの天使論全体においては、かなり特殊な意味においてはああるものの天使も時空上の制約をこうむるとは言える¹⁹）。他方でアキナスは、生成消滅するものに対しては時空上の制約を認めている。それゆえ、②におけるアキナスとギセリンの違いだけに注目するなら、アキナスが議論の対象としている天使とギセリンが議論の対象としている生物の違いそのものによって説明できるだろう。少なくともアキナスにおいては、生成変化する通常の生物と天使は種類の異なる存在者として位置づけられている

¹⁸ 天使に関する種の個体説については次も見よ：石田隆太、「諸天体と諸天使の種別化：トマス・アキナスと種の理論」、『哲学』（三田哲学会）145（2020）：35–69；「トマス・アキナスと天使の個体化——個体化の原理の射程をめぐって」、『中世思想研究』59（2017）：31–45。

¹⁹ 天使に固有な時間とされる「永劫」（aevum）については、たとえば『神学大全』第1部第10問題第5–6項を、天使と「場所」（locus）との関わりについては、同第1部第52–53問題を見よ。

からである。

それでは、他の四つの基準についてはどのようなことが言えるだろうか。①例化不可能性については、アキナスも各々の天使に対して認めていると思われる。前節で見たアキナスによる第二および第三の論証では、まず月や太陽という個々の天体がそもそも例化不可能な存在者であるがゆえに、天体からのアナロジーに基づいて天使においても例化不可能性が認められるという論法が採用されている。しかしながら、おそらくギセリンとの大きな相異となるのは、アキナスが天使に対して本質主義を採用しているということである。すなわち、各々の天使はそれぞれに固有な種の本性を自分だけが体現しているという限りで例化不可能な存在である。このことは、前節で取りあげた第一の論証でアキナスが白さや人間性の形相がプラトンのようなものとして捉えられるような可能性について言及したことからも窺える。ただし、白さや人間性の形相自体がアイデアのように実在することはアキナスの考えとは異なるものである²⁰。プラトンのようなアイデアとの大きな違いは、アイデアは複数のものに分有されるのに対して、天使はそうではないということである。敢えて言うなら、ギセリンがクラスという普遍と個体を峻別したのに対して、天使に関してアキナスは普遍がまさに個体として存在していることを主張している。ここからは、本質主義と両立する種の個体説という（ギセリンからすると奇妙に見える）考えを読み取ることが可能である。

したがって、④法則における無機能、⑤定義する性質の欠如、⑥存在論的な自立性については、以上のような理由でアキナスはギセリンとは異なる立場に立つことになる。特に違いが際立つ点としては、④に関しては秩序や完全性といったこの世界やそこに存在する諸事物に対する理想的な状態を前提とする善に関する法則をアキナスにおいては想定する必要がある。ただし、⑥存在論的な自立性については、ギセリンがアリストテレスに帰したように個体よりも種の方に存在論的な自立性を認めるとアキナスが断言しているわけでもない。アキナスの考えは、天使に関する限り、個体であることと種に属することは同時的であるというものである。さらに補足するなら、アリストテレスですら

²⁰ 『靈的被造物について』第8項第4異論解答や『神学大全』第1部第50問題第4項主文を見よ。

この考えを部分的には認めていたと解釈する余地もある。もちろんアリストテレスは、アキナスのように天使などという存在者のことを念頭に置いてはいなかった。他方で、アキナスの天体に関する主要な知識を供給している源泉の一つはアリストテレスの『天界について』(*De caelo*)である。すなわち、個々の天体は自分だけが固有な種的本性を体現しているという限りで、天体において個体であることは種に属することと同時的であるという考えをアリストテレス解釈の一つとして位置づけることは可能である²¹。それゆえ、アキナスだけではなくアリストテレスにおいても、個体であることが種に属することと同時的であるということを部分的には認められる可能性がある。

5 おわりに

種の個体説に関してギセリンとアキナスの議論を突き合せた結果、ギセリンは本質主義を排した例化不可能な個体概念を主として想定しているのに対して、アキナスは本質そのものを体現する個体という意味で例化不可能な個体概念を想定しているという違いが明らかになった。こうした本質主義そのものを問題にするなら、生物学哲学では「恒常的性質クラスター理論」(Homeostatic Property Cluster Theory)²²や「関係的本質主義」(Relational Essentialism)²³といった考えを考慮することができるし、また「心理的本質主義」(Psychological Essentialism)²⁴に依拠して議論することもできる²⁵。このような状況にあって本稿ができることは、ギセリンによる議論との対照から、例化不可能な普遍そのものを体現するという本質主義の可能性をアキナスの天使論から抽出するこ

²¹ この場合に、少なくとも西洋中世において議論の対象となったアリストテレスの原典は『天界について』第1巻第9章(278a22–b8)である。アキナス以外でも、ボナヴェントゥラ(『命題集注解』第2巻第3区分第1部第2項第1問題)やドゥンス・スコトゥス(『オルディナティオ』第2巻第3区分第1部第7問題)もこの箇所を議論の題材にしている。

²² Richard Boyd, “Homeostasis, Species, and Higher Taxa,” in Robert A. Wilson, ed., *Species: New Interdisciplinary Essays*, Cambridge, Mass.: The MIT Press, 1999, 141–85.

²³ Paul. E. Griffiths, “Squaring the Circle: Natural Kinds with Historical Essences,” in Wilson, ed., *Species*, 1999, 209–28.

²⁴ Susan A. Gelman, *The Essential Child: Origins of Essentialism in Everyday Thought*, Oxford: Oxford University Press, 2003.

²⁵ こうした問題に関しては主として次の諸文献から学んだ：網谷祐一、『種を語ること、定義すること 種問題の科学哲学』、勁草書房、2020；千葉将希、「生物種の実在論は単なる心理的本質主義の産物か」、『哲学・科学史論叢』18(2017): 59–85；田中泉吏、「生物学的個体化——有機体と種のケース」、『哲学』(三田哲学会) 134(2015): 55–77；植原亮、『実在論と知識の自然化 自然種の一般理論とその応用』、勁草書房、2013, 73–114。

とである。アキナスの天使論において各々の天使そのものは「個的な本質」(individual essence)であるという解釈は既に中世哲学研究においても言われている²⁶。この個的な本質という概念がどのような哲学的意義をもつのかについてはこれからさらに検証する必要があるが、本質主義と両立する種の個体説という可能性を提示する事例としてアキナスの考えを位置づけることにしたい²⁷。

²⁶ Giorgio Pini, “The Individuation of Angels from Bonaventure to Duns Scotus,” in Tobias Hoffmann, ed., *A Companion to Angels in Medieval Philosophy*, Leiden: Brill, 2012, 79–115.

²⁷ 本稿は、第1回日本アリストテレス協会主催研究発表会での口頭発表(2017年12月26日)で用いた原稿にもとづく。当日に議論できた参加者すべてに感謝したい。口頭発表からは5年ほどの月日が経ってしまったが、変更は主として文献情報を付加するにとどめた。